

教員免許更新講習

教員免許更新制は、教員として必要な資質能力が持続的に保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身につけることにより、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目的として導入されたものであり、この目的を実現するために、最新の知識技能の修得を目指す教員免許更新講習を文部科学大臣の認定を受けた大学等が開設することとなっている。

本学では、これまで中学校・高等学校教員免許に関して、教員免許更新講習実施の申請を行い、認定を受けており、選択領域「教科指導・生徒指導その他教育の充実に関する事項」（学校種・教科種などに応じた内容を扱うものであり、各教科の指導法やその背景となる専門的内容、生徒指導等、幼児・児童・生徒に対する指導力に係る各論的な内容を中心に扱う）に関して、2009年度、2014年度の音楽科に続いて、2015年度には、国語科教員を対象として、3つの講座を開催した。

講習は2015年8月3日、4日、5日に行われ、各講座のテーマは、講座Ⅰ「大阪を描いた文学－近代を中心に－」（担当：荒井真理亜准教授）、講座Ⅱ「師の説になづまざることは、どう実践されたか」（担当：千葉真也教授）、講座Ⅲ「古典を学ぶ－『枕草子』を中心に－」（担当：鈴木徳男教授、川中美津子教授）であり、受講者数は、講座Ⅰ：20名、講座Ⅱ：17名、講座Ⅲ：29名であった。

講習後の受講生へのアンケートにおいては、近世と同様、近代にも大阪には文学が華開いていたことを知り、大阪の地域性、アイデンティティを再認識した、大阪の文学に関して得た知

識をもとにフィールドワークなどを採り入れた実践を行いたい、近世文学の著者たちがまるでそこにいるかのような生き生きとしたリアリティのある講師の語りを拝聴して、自分自身の授業のあり方を再考させられた、工夫された講座を聴いて古典を学ぶ楽しさをあらためて思い起こし、国文学を初めて志した時の気持ちが蘇ってきた、貴重な資料（春曙文庫）や学内の人的資源を活かして、十分な専門性を担保している相愛大学の教育に今後も期待したい、等々の感想が述べられた。（長谷川精一）



講座Ⅰ

「大阪を描いた文学－近代を中心に－」

平成18年12月22日に公布・施行された教育基本法には、「教育の目標」第二条の五に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とある。また、中学校および高等学校の学習指導要領でも、教材選択で配慮すべき点の一つに「我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」が挙げられている。

郷土の文学に触れることは、伝統と文化をはぐくんできた郷土を発見し、理解を深めることにつながるのではないかと。本講習では、大阪が

描かれた小説やエッセイを取り上げた。人物の性格や言葉遣い、作品の舞台、時代背景などに着目し、〈大阪らしさ〉とは何かを考えた。ステレオタイプで語られがちな大阪だが、織田作之助が「木の都」で「大阪は木のない都だといはれてゐるが、しかし私の幼時の記憶は不思議に木と結びついてゐる」と述べているように、実は多様なイメージを有している。そのことを作品の比較によって確認した。国語の授業で大阪の文学を取り挙げる際には、大阪文化の独自性と多様性を生徒に気づかせることを目標としたい。作品の読解とあわせて、ディスカッションやプレゼンテーション、フィールドワークも提案した。作品の舞台となった場所は地図や写真で提示したが、受講生からは「実地に踏査できればよかった」という意見をいただいた。今後の参考にしたい。(荒井真理亜)



講座Ⅱ

「師の説になづまざる事」

高等学校の教科書には『玉勝間』の中の「師の説になづまざる事」がよく取り上げられている。平明な文章だが、国学者の著作に対する注釈は少なく、参考資料も多くはない。ある教科書は「作者の主張をまとめ、それについてどのように思うか、話し合ってみよう」と問うているが、主張が具体的にどのように実践されたか

調べることはそれほど簡単ではない。だが、実践されたあり方を知ることで、学習者の思いも変わってくる。教える側は、宣長の実践について多少の知識を持つておくべきであろう。そのような趣旨で、以下のように講座を組み立てた。

①師の説になづまざる事

教材としての「師の説になづまざる事」を確認した

②先達－契沖と真淵・③源註拾遺 万葉代匠記 万葉考・④松坂の一夜・⑤年表で見る宣長と真淵・

宣長に影響を与えた二人の国学者を概説し、権威有る学説でも吟味する態度が契沖以来のものであることを確認した。

⑥義之の訓－『万葉集問目』・⑦義之の訓－『万葉考』と『玉の小琴』・⑧義之の訓－手沢本『万葉集』・⑨『古事記』研究における師の説

この講座の眼目である。宣長と真淵の質疑応答『万葉集問目』において、宣長が師の説に批判を加え、師である真淵も真剣に対応していること、宣長の主著『古事記伝』においても師の説が批判を交えながらも頻繁に引用されることなどを示した。

⑩松坂の一夜①玉勝間・⑪松坂の一夜②諸説・

⑫松坂の一夜についての推定

宣長の学問に方向を与えることになった「松坂の一夜」については宣長自身が『玉勝間』で述べているが、『万葉集問目』を資料として、二人の会話の細部を推測した。

取り上げた材料について最新の知見を紹介しようとしたが、ハードな古文の授業のようになってしまった。基礎的な事項の紹介も、丁寧に行うべきであったと思う。

なお、翌日の講座Ⅲで平安時代の男子の正装

を着用する機会に恵まれた。衣装が人間の心理に影響することを実感した。

講座Ⅲ

「古典を学ぶー『枕草子』を中心にー」

講習の時間割と概要は以下の通り。

①相愛大学図書館の「春曙文庫」について

「春曙文庫」の内容、価値、設置の経緯などを説明した後、実際の展示を見学した。受講生の皆さんは、中学・高校の教科書の底本となっている写本を目の前にして大変興味深い様子であった。ガラス越しではあったが、『枕草子』の写本、版本や注釈書類を見ながら、同文庫の規模を実感していただいた。今回のために展示を準備し資料を作成してくれた図書館の関係各位に感謝したい。

②十二単衣の着付け

担当した川中教授のコメント参照。

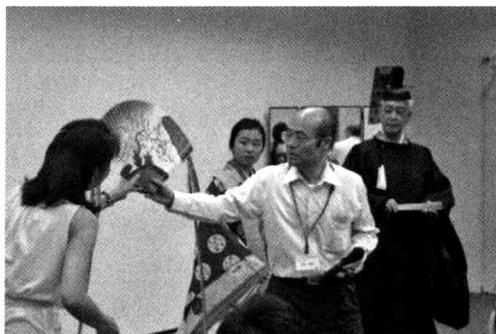
③田中重太郎と『枕草子』について

『枕草子』の研究をライフワークにしていた田中重太郎博士（本学元教授）の学問的業績についてレジュメを使って詳細に述べた。とくに「春曙文庫」の基になっている『校本枕冊子』の方法や意義、その研究態度に関して解説した。国文学の基礎的な研究を知り考えてもらうことで、古典教育の現場を活性化できればという思いがある。

④まとめと試験

「春曙文庫」に取材したNHKのビデオなどを使って講座の結びとし、まとめの試験を実施した。

直接に現場の教室で役立つかは別にしても、聴講してくださった現役の先生方の意見や感想によると、本講習の企画意図は十分に伝わったと思われる。相愛大学の教育資産を活用した講座の目標を理解し評価して下さった。古典文学を学んだ学生時代を思い出してありがたかったという感想が印象に残った。（鈴木徳男）



平安時代の服飾文化を知って頂くために図版資料での説明と、引き続き堀口洋子・木村倫子両氏による本学所蔵の唐衣裳装束の着装を見学しながら、平安時代の人々の美意識や生活などについての解説をした。また、男性の衣冠を事前に着付けておき、男女が並ぶ姿を見せる事ができた。

その後、一部の受講生の方は実際に装束に袖を通し、言葉や文字で表わされている以上のものを体感して頂けたと思う。（川中美津子）